

令和3年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

- 日 時：令和4年2月1日（火）15:00～
- 場 所：仙台市市民活動サポートセンター6階 セミナーホール
- 出席委員：高浦康有委員長、其田雅美副委員長、安藤歩美委員、大庭克己委員、佐々木綾子委員、高橋由佳委員、傳野貞雄委員、沼里理恵委員、緑上浩子委員
- 欠席委員：石田祐委員、石塚直樹委員
- 事務局：市民局長、市民局次長、協働まちづくり推進部長、市民協働推進課長、企画係長、事業推進係長、NPO認証係長、地域政策課長、青葉区地域力推進担当課長、太白区地域力推進担当課長、市民活動サポートセンター長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

（1）協働によるまちづくりのさらなる推進に向けて（意見交換）

　テーマ1：地域に根差し、ともに歩む協働

　テーマ2：時代の困難に挑戦する新しい発想の協働

3 その他

4 閉会

○会議内容

1 開会

[事務局（企画係長）]

ただいまから令和3年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。

議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日は石田委員、石塚委員から欠席のご連絡をいただいております。11名中、9名にご出席いただいており、過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

2 議事

（1）協働によるまちづくりのさらなる推進に向けて（意見交換）

テーマ1：地域に根差し、ともに歩む協働

[事務局（企画係長）]

それでは、ここからの議事進行は高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

皆さん、どうもこんにちは。新年に入りまして最初の、そして今年度としては最後の委員会になります。2時間ほどのお時間を頂戴しまして、本市における協働まちづくり推進の在り方について、話題提供をいただきつつ、また皆さんのご知見を踏まえていろいろなご示唆を頂戴できればと思います。

最初に、今回の議事録署名人については、名簿順で佐々木委員にお願いしてもよろしいでしょうか。お願いいたします。

それでは、議事内容に入らせていただきます。議事の1つ目になります、協働によるまちづくりのさらなる推進に向けてということで、前回に引き続きテーマに沿って意見交換を行いたいと思います。進め方は、前回同様、初めに事務局からテーマに関連する話題提供をいただき、その内容をきっかけ、ヒントとしながら意見交換を進めてまいります。今日はテーマが2つございまして、1つ目の話題提供、意見交換が終わりましたら2つ目に移るという流れで進めさせていただきます。

まずは1つ目のテーマ「地域に根差し、ともに歩む協働」について、事務局からお願いいたします。

[事務局（市民協働推進課長）]

それでは、私から1つ目のテーマに関する話題提供について、ご紹介いたします。「地域に根差し、ともに歩む協働」の話題提供としまして、本日は青葉区役所・太白区役所の地域力推進担当課長から、その取り組みについてのご紹介をいたします。地域力推進担当と

いうと、あまり耳なじみのない方もいらっしゃるかと思いますので、その概略について、ご説明いたします。

資料1の表紙をご覧ください。〈参考〉という枠囲みに、区役所の組織の概略図を載せてございます。仙台市には5つの区役所と2つの総合支所がございますけれども、各区役所にはまちづくり推進部という組織がございます。この中には、まちづくり推進課など町内会関係や区民協働まちづくり事業など、区民に身近な業務を行っている課がございますが、このまちづくり推進部の中に、今年度から地域力推進担当課長というポストが設置されております。この前身が平成29年に設置されたふるさと支援担当課長ですが、今年度から名称を変更し、地域力推進担当課長となっております。この担当課長の下に3名ほどスタッフが配置されまして、地域と協働で地域課題の解決や地域活性化に向けたプロジェクトを取り組むほか、各地域で市民が主体となって取り組むまちづくりの様々な団体に応じた伴走型、アウトリーチ型の支援を行っております。一般的には、区役所の業務というのは横並びになっておりまして、別な区役所であっても同じ課の同じ係であれば基本的に同じ業務を行っておりますが、この地域力推進担当の場合は各区の地域特性や地域課題に応じたそれぞれ異なる取り組みを行っているところでございます。

本日は、5つの区の中から2つの区の地域力推進担当課長から、それぞれの区で行っている取り組みについてお話しいたしますので、ぜひこの後の意見交換のヒントとしていたただければと思います。始めに青葉区地域力推進担当課長から、続いて太白区地域力推進担当課長からお話をいたします。

[事務局（青葉区地域力推進担当課長）]

私からは、青葉区地域力推進担当で取り組んでおります「出前」の取り組みについて本日ご説明いたします。こちらの「文書を捨てよ、町へ出よう」と表紙に書いてございます資料をご覧ください。こちらは、私の尊敬するマルチ作家寺山修司さんの著作のタイトルをもじったもので、私どもの取り組みは、部屋に籠ったり、文書ばかり見ていないで町へ出ていこうという発想を基本に据えて出前の取り組みをやっていこうと考えたものであります。

下の段の2ページ目になります。本年度の中心的な取り組みといたしましては、出前まちづくりサポートセンター運営事業というものを実施しております。職員が直接地域を訪問させていただきながら、地域の皆様とともに町内会などの在り方を探っていこうという取り組みでございます。コミュニティ・センターという市の施設に私どもが出向いて、なるべく地域の多くの方に寄っていただき、平たく申し上げますとお茶飲みをしましょう、私どもと一緒に雑談をしませんかというところをスタートとした取り組みを、本年度から開始しております。実施の背景といたしましては、青葉区役所のまちづくり部門の主なカウンターパートが町内会関係の皆様で、町内会長などの方々とはお話しする機会がございますが、もっともっと対話の裾野を広げていく必要があるのではないか、地域の皆様の本

音を深掘りしていく必要があるのではないかという課題意識がございました。その一方で、青葉区内には500ほどの単位町内会があり、なかなか1軒1軒を回って皆様とお話をするということがかないませんので、まずは最初の一歩としまして地域を絞り、連合町内会という少し大きめの組織を単位として事業展開を考えたというところです。

3ページ目をご覧ください。本年度の対象地域は青葉区国見地区といたしまして、国見地区連合町内会に窓口となっていました。国見地区の現状の主だったものを掲げております。まちづくりに関係する主な特徴としては、国見地区ではもともと国見まちづくり会という地域独自の枠組みがございます。地区の町内会などが中心となり、福祉・防災などなどに関わる各種団体が集まる組織になっておりまして、常に分野を超えたつながりの下で地域づくりを進めていらっしゃるという、とてもありがたい組織が既にあるという状況でございます。さらに国見地区には大学が2校ございまして、何か力になってくれる方々を探すといったときに学生の力というのはとても大きいと思っており、そういう特徴のある国見地域に入っていけば、我々の思うような取り組みも進められるのではないかと考えるに至ったところであります。東北福祉大学、東北文化学園大学とは平成22年度末、平成23年2月に、地域づくりに関係するような取り組みと一緒に進めてまいりましょうという内容の協定を締結しております。その他の状況については、資料をご覧ください。単位町内会は23ございまして、高齢化率、仙台市青葉区に比べますと少し高いという地域になっているなど、ご紹介しております。

続きまして、下の段4ページです。令和3年度の実績でございます。5月に先ほど申し上げました地域の基礎となっている組織、国見まちづくり会への参加がスタートとなっております。ここに至るまでも、地域の主要な皆様とは打合せを重ねた上で地域の中に入っていくという段取りを踏んでおりますが、公には国見まちづくり会への参加が1歩目ということになっております。続きまして、町内会の皆様に育成奨励金というものを交付するのですが、申請書を区役所の窓口に持ってきてくださいとか、郵送してくださいというお願いをするのではなくて、私どもが出向きますので、お近くの国見コミュニティ・センターにお持ちください、そのときにせっかくですので雑談しましょうという取り組みを3日間にわたり6月に実施いたしました。ほとんどの単位町内会長がお見えになり、職員が連日2人ずつ出まして、皆様と対話をさせていただきました。9月には、既存の事業ではありますが、町内会活動を紹介する出前講座というものを国見小学校で実施いたしました。手作りの紙芝居などを使って、町内会について子供たちにもよく分かってもらおうという取り組みをしたところであります。

続きまして5ページ目でございます。10月に東北文化学園大学にお招きいただき講座の支援を行ってまいりました。「地域探求Ⅱ」という講座の講師を私ども職員が務めましたが、5月の国見まちづくり会に参加したというところがきっかけでございました。コロナの第5波が終わってすぐの辺りだった11月には、地域の方もなかなか集まれないという状況がございましたので、せめて役員などの主だった皆様とは顔を合わせておこうということで、

連合町内会の会長、副会長と、今後の取り組みについて打合わせをさせていただいたり、あるいは12月には出前草刈りと称して、国見コミュニティ広場のフェンスに絡んだツタなどを、町内会や学生の皆様と一緒に除去するという活動をしてみたりということを重ねてまいりました。

6ページ目でございます。私どもまちづくり部門は、地域の方と顔を合わせてお話しすることで、やっと事業が進められるというところがございますが、新型コロナ感染症拡大の影響がとても大きくて、その顔合わせということがなかなか、かなわなかつたというところがあり、昨年度や今年度は地域への出前はなかなか思うようにいきませんでしたが、6月に行ったような取り組みの中などでは、担い手不足などが町内会全体、ほぼ共通のお悩みだなということをキャッチすることができました。町内会の次代を担う世代、40代から60代ぐらいの方が誰かいませんかというお話を聞くのですが、なかなかそういった方々はお仕事や子育てなどでお忙しい、時間がないという方々が多いというようなお声をたくさん頂戴したところであります。どのようにしてそういう若い世代、次の時代を担う世代の皆様に町内会に関わっていただこうかと考えたときに、SNSやアプリケーションなどを活用し、なるべく時間にとらわれずとも町内会活動に関われるようなツールの在り方を検討してはどうかという仮説に現在至っているところでございます。

次のページ、これから取り組みでございます。先ほどの仮説を受けまして、いずれも次年度に向けた検討中ということになりますが、次代を担う世代の皆様に実際に町内会などに関わっていただく機会を創出・ご提供していきたいと思っております。矢印が3つありますが、1つ目は先ほど申し上げましたデジタルツール、SNSやアプリケーションなどの学習会（体験会）に参加していただく機会を私どもで設けたいと思っております。デジタルの便利さや楽しさを取り入れていただき、コミュニケーションの活性化につながる取り組みを模索しているところでございます。続きまして、デジタルだけではなく、関係団体を交えてイベントのようなものを開催し、実際に地域の方々に顔と顔を合わせていただく機会も設けたいと考えております。各種団体間の横のつながりだけではなくて、異なる世代間の縦のつながりも生み出したいと考えております。最後が地域の方々との対話でございます。こちらは出前まちづくりサポートセンター運営事業の原点である地域の方々とお茶を飲みながらでも対話をして、皆様が本当に普段思っていることを聞かせていただき、一緒に解決策を考えていくというような取り組みをしたいと思っております。

続きまして8ページです。こういった取り組みを進めていくに当たって、区役所内の関連部署との連携も重要であるということに気づかされたところです。1つの例として、町内会を語るときに地域住民の皆様の高齢化や、いろいろな皆様が地域にお住まいということがあり、まちづくりにおける保健福祉の視点の重要性というのは大変高いと思っております。ただ、まちづくり部門だけだと、なかなか福祉の施策分野というのは専門ではないというところがございますので、私ども青葉区では区の保健福祉部門との連携が重要、連携していくかなければいけないと考えております。こちらに掲げましたとおり、双方向と

ということで、保健福祉のネットワークや知見スキルなども活用させてもらったり、保健福祉部門も地域に溶け込んでもらえるように、まちづくり部門の取り組みを活用してもらい、先ほどの地域イベントなどと一緒に参画してもらうということを考えておりました。

9ページでございます。こちらは参考となります、出前まちづくりサポートセンター運営事業以外に「出前」とつくような取り組みを例示してございます。先ほどご紹介した小学校に町内会の大切さですか活動の様子などを伝える「小学校出前講座」ですか、戦災復興記念館主催となります「平和学習」というものも市内の小学校を対象に、こちらから出向いて空襲体験談などを子供たちに伝えるような活動をしております。また、全ての区共通で「市政出前講座」ということで「よくわかる町内会」をテーマとした基本的な町内会の情報を広く市民の皆様にお伝えするような取り組みも進めているところでございます。

青葉区まちづくり推進部地域力推進担当の説明としては以上でございます。

[事務局（太白区地域力推進担当課長）]

続きまして、太白区地域力推進担当の取り組みでございます。資料をご覧ください。太白区では課長のほか職員3名、計4名で担当業務に取り組んでおります。直接に事業やイベントを実施するというよりも、地域主体の活動を側面あるいは後方から支援する、下支えするというスタイルで事業展開をしております。

スライド2枚目、秋保地区を除いた太白区の概略図でございます。これからお話しする地域をオレンジ色で示しております。太白区の主な取り組みは2事業ございます。未来につなぐ地域力推進と「小さくても未来へつながる連携」促進です。未来につなぐ地域力推進では、区内の中山間地域の活性化を目的に生出地区活性化事業として地域のまちづくり団体の活動支援を行っております。後ほど生出と坪沼の事例を紹介いたします。太白区では、明確な地域課題の解決を支援する一方で「小さくても未来へつながる連携」促進と銘打ちまして、規模は小さくても地域課題の解決につながったよい取り組みの横展開を図る事業を取り組んでおります。課題の発掘や解決の支援を行うとともに、異業種・多分野との連携による新しい価値の創出を目指して、現在企業や大学、商店街、地域包括支援センターなど地域の力を借りしながら地域課題の解決支援に努めているところです。課題解決に至った事例につきましては、そのプロセスや成果をリーフレットにまとめ、今後ほかの地域へ展開を図る際に利用していくという考えでございます。

スライド3枚目からは、生出地区と坪沼地区の事例紹介でございます。生出地区・坪沼地区は、ともに旧生出村に属しておりました、いわゆる中山間地域と称される農業の盛んな地域です。両地域では、これまでまちづくり専門家派遣制度によるまちづくりアドバイザーの派遣を受けて活性化策の検討を重ねてまいりました。現在はそれぞれに「生出地区まちづくり委員会」「やるっっちゃツボヌマ」「仙台坪沼活性化推進協議会」などの地域団体が主体となりまして、地域住民による地域のための地域づくりを行っているところです。

区役所は、地域の主体的な活動を支援する立場で関わっております。

スライド5枚目です。生出地区では、生出学区連合町内会に選出されております生出地区まちづくり委員会が中心となりまして、活動の拠点となる施設整備、まち歩きマップ作成のほか特産のこんにゃくづくり、干し柿づくり、農業体験イベントなどソフト事業を実施しております。区役所では、これらの活動に必要な補助金の申請または関係部署や大学との連携の調整、商品開発援助などの支援を行ってまいりました。今年度は、長町地域で新しく発足したまちづくり中間支援団体ながまちマチキチとの連携のもと、農業体験やまち歩きを行い、生出地区と都市部の住民交流の機会を持ちました。区役所では、連携に係る調整、プレスリリース、関係部署調整、当日の運営支援などを行いました。また事業の補助終了を見越した活動資金の自己調達策としてイチジクを用いたパウンドケーキや、干し柿ペーストを用いたパンの商品開発を勧め、加工者とのつなぎから販売までの支援を行ったところです。

次でございます。坪沼地区では、やるっちゃんボヌマなどによる仙台でも珍しい栽培指導型市民農園の運営が好評のほか、産直市や収穫祭、坪沼川に舞う「蛍と平家琵琶の夕べ」などイベント開催について支援を行っております。今年はコロナ禍で「蛍と平家琵琶の夕べ」や、農園利用者を対象とした畑のレストランなど中止になったイベントもございましたが、コロナ禍の間を縫って八木山地区と連携した地下鉄八木山動物公園駅での産直市、田舎の収穫祭などが実施できたことは、地域にとっても大変有意義だったのではないかと思います。区役所では会場の許可申請や広報、収穫祭の立て看板製作などのほか、当日のコロナ対策用品やマンパワーの提供等運営の支援を行っております。また、市長訪問視察の調整対応なども行ったところです。今年度は、収穫祭の開催に併せ坪沼の地域外交流人口拡大に向けた新たな試みとしまして、長町の旅行会社とながまちマチキチとの連携により、区内の中山間地域の魅力に触れるモニタリングツアーを実施いたしました。30名の参加者の方に、坪沼の自然や歴史、食事、人の魅力に触れていただきました。参加者へのアンケートやヒアリング調査の結果を見ますと、坪沼のよさをしっかりとアピールできたのかなと思います。

スライド7枚目からは、小さくても未来へつながる連携促進のご紹介です。1つ1つは小さな地域課題であっても、その解決のプロセスや成果をほかの地域の地域課題解決へ生かしていくこうという太白区独自の取り組みとなります。ここでは、移動販売車導入の取り組み、区の関係者はお刺身理論と呼んでおりますけれども、その支援についてご紹介いたします。八木山南地区から地域交通に関する声が聞こえてまいりました。バスの利便性が悪いというような交通の問題かとよくよく話を聞いてみたところ、実は買い物が不便だという声が引き出されてまいりました。それであればと宅配利用を提案したところ、既に宅配は利用しているということで、では一体何が課題なのかと、さらによく話を聞いたところ、宅配では鮮魚、生の魚、刺身が買えないといった課題でございました。当初、地域交通の課題と思われたものが、実はお刺身を食べたい、自分で選んで鮮魚を食べたいという

真実に行き着いた瞬間でした。早速大手の小売店と協議を行いました、移動販売車の乗り入れを実現することができました。この実績を踏まえまして、今年度は人来田地区へも移動販売車を誘致できたところでございます。

このような小さな地域課題解決の取り組みを幾つかの地域で行っております。これまで既にご紹介した取り組みもございますが、スライド8枚目には今年度の取り組みを4つほど記載しております。秋保や坪沼など公共交通の便がよくない地域では、地域と行政によるオンデマンドタクシーを運行しています。運行の持続化のためには利用率の増加を図る必要がございました。今年度は地域包括支援センターと連携しまして、地域包括支援センターの健康教室、こちらが開かれるときにタクシーの利用を促進するという仕掛けをしておりました。2つ目は、生出まちづくり支援の中でも触れましたが、活動のための自己資金調達の一助となるよう干し柿やイチジクなど地域の特産物を生かした商品開発を支援しております。西中田地域では、市内最古木と言われる樹齢1300年を超すカヤがありますが、地域の商業振興組合が中心となり、このカヤの実を活用した商品開発、これによる地域おこしを今模索しております。宮城大学と連携を取りまして、まずはフレグランスの商品化を私どもと一緒に行っているところでございます。4つ目は、これも先に触れておりますが坪沼の交流人口拡大に向けて旅行会社とながまちマチキチと連携し、中山間地域の魅力に触れるツアーと、それに伴うアンケート等の意識調査を実施しました。次年度も地域支援を生かしたツアーを関係団体等と連携して実施していく予定でございます。

ここまで2つの事業についてご紹介してまいりましたが、スライド9枚目には地域力推進担当のその他の取り組みを記載しております。まず、八木山では金剛沢緑地の整備、LEDランタンによるアートイベント、地下鉄駅広場の活用、助成金の申請支援などで地域団体の活動をお手伝いしております。また、太白区には町内会や地区社協など地域の5種類の団体で組織された太白区地域活動推進委員会、通称五者委員会と呼んでいる組織がございます。区社会福祉協議会と協働で事務局を担い、主に地域防災に関わる研修会等を開催しております。閉校した小学校を民間に貸し出す利活用事業や、市民センター建て替えなど地域の合意形成が必要な場面で意見の集約や調整に当たっております。地域資源による地域活性化として、特産の太白ネギのPR支援や、捕獲イノシシのジビエ化の調査研究などにも取り組んでおるところです。また、今年度長町南の大型店舗と地域貢献、市民サービス向上といった観点から連携協定を締結しました。これにより、店舗内を歩き健康増進を図るスタンプラリー、子育て用品販売店の協力による認可保育園申込みの事前相談会、飲食店と連携した野菜摂取の啓発など多数の事業を支援しております。また、南の拠点長町地区におきまして、あすと長町のハード整備完了やまちづくり中間支援団体ながまちマチキチの発足などを受けまして、長町のにぎわいづくりに取り組むこととしております。今年度は地域のNPOや企業に集まっていただき、地域の実情を知るための懇話会を2度開催いたしました。そのほか地域交通や商工会振興など、関係部署との情報共有に努めているところです。

最後のスライドになりますが、これまでご紹介した支援事業を含めまして、太白区の地域力推進担当の取り組みを地図に落とし込んでみました。なお、秋保地区につきましては別途秋保総合支所が担当しておりますので、割愛しております。

以上、太白区における地域力推進担当の事業についてのご紹介でございました。

[高浦委員長]

青葉区と太白区の取り組みについて話題提供いただきました。こうした内容も参考にしながら、本日のテーマ「地域に根差し、ともに歩む協働」に沿って意見交換していきたいと思います。非常にたくさんの事例紹介で、青葉区ですと都市部住宅地域におけるまちづくり、高齢化が進んでいる中で、どう次世代のまちづくりの担い手を育成していくのかという話が中心だったと思いますし、また太白区は、こちらも地域特性を反映して、特に太白区西部の中山間地域における農業振興も含めて、どう地域づくりを進めて活性化していくのかという、そういう視点であったかと思います。大学との連携ですか、旅行会社や小売店などの事業者との連携というのも見られましたし、また地域のまちづくり団体との取り組みというのもありました。

多様なステークホルダーとの連携を生かしながら、地域住民の視点に寄り添った形で、主体は市民という枠組みでにぎわいづくりをされているなという印象を強く受けましたがいかがでしょうか。

[安藤委員]

太白区の「小さくても未来へつながる連携」の事業が、小さい地域で試してみて、うまくいったら横展開するというアプローチってとてもいいなと思ったのですが、横展開するときに、どのような手段を今具体的に取られているのか。事例紹介のリーフレットを作っているという話もありましたが、それ以外でどのように進めているのかお聞きしたいです。

[事務局（太白区地域力推進担当課長）]

横展開の成功事例がまだ少なくて、移動販売の事例ぐらいですが、今後、いろいろな加工業者と連携しながら、また別の地域で地域の食材、地域の特産を活かしながら商品開発などをやっていきたいと思っています。地域の声をこちらで吸い上げて、それを加工業者につないでいくというようなことが、私たちの仕事なので、その際にリーフレットを用いて、取り組みや成功事例、成果をご紹介する形で、まずはそこから進めていくという段階でございます。

[安藤委員]

私も八木山に住んでいたことがあるので、お刺身理論、すごく理解できるのですけれども、小さい地区でまず試してみて、ほかの地域でもそれが当てはまるという例って、本当

にたくさんあると思います。1つの地域でやってみて、どんどんほかの地域で区も超えてから試していくというアプローチをしていくといいのかなと、お話を伺って思いました。

[高浦委員長]

移動販売の事例、本当に興味深いですね。お刺身が食べたいという、その本音を丹念に拾い上げてというところが印象深かったです。以前、奥会津の三島町で、まさに本当に過疎地域ですけれども、日産自動車の開発部隊が中心となって、鮮度のいいものを、冷たいものも温かいものも両方そのままの温度で運べる電気トラックを使って届けるという日産の持つリソースの強みを生かした社会貢献事業をしていました。おばあちゃんたちが商品を取るときも、棚の高さを日産のエンジニアが微調整しながら、より地域に密着したような事業展開をしていて、電気トラックを日産福島営業所が一部貸し出したりしているようです。いろいろと企業との取り組みを生かしたものがあるので、ぜひ、小売店以外の自動車販売事業者とか、いろいろな連携を深めていただけすると、もっと広く、深く展開が見られるのかなと思いました。

[高橋委員]

青葉区と太白区それぞれに質問があるのですけれども、青葉区については、伴走型、アウトリーチというキーワードがありましたが、これを継続していくというのが大変かと思います。私たち福祉の分野でもアウトリーチ活動は非常に重要だと思っていまして、これはぜひ継続してほしい取り組みだと思っているので、そういったところで何かご苦労など、あるのではないかと思いました。また、4ページの町内会等育成奨励金交付金について、どのような制度なのか教えていただければと思います。太白区については、栽培指導型の市民農園ですが、具体的にプログラム等がどうなっているのか、どのような派生効果、シナジー効果として表れているのかといったことをお聞きしたいなと思います。

[事務局（青葉区地域力推進担当課長）]

青葉区に関して、1つ目は伴走というか地域と一緒にやって取り組みを進めていくに当たっての苦労や工夫というようなご質問だったかと思います。資料の中にも出てまいりましたように、私どものカウンターパートとしては町内会の方々を、まずは一義的な窓口とさせていただいていますが、町内会の皆様は、ご高齢の方が多くいらっしゃいます。我々が伴走し続けるという苦労もありながら、地域も地域として継続して活動していただかなくてはいけないというところが間違いなくあります。資料の中で触れておりましたが、地域でもどんどんバトンを次の世代につないでいく必要があるものの、なかなかバトンタッチがうまくいかない、そのフォロー、ご支援を私ども区役所もなかなか上手にはできないかも知れないといったところは感じながら地域の中に入らせていただいているというところでございます。そのために、今回デジタルツールを使ったような何か仕掛けをつ

くって、いろいろな方に地域の活動を知っていただきたいと考えているところでございます。

2つ目の町内会の育成奨励金でございます。こちらは市内共通だと思いますが、町内会に加入している世帯、5世帯当たり1年間530円、例えば100世帯の町内会には5万3,000円という計算で、奨励金をお渡しさせていただいております。

[事務局（太白区地域力推進担当課長）]

ご質問の栽培指導型農園でございますけれども、年間3万5,000円の費用を払いますと、農業で生計を立ていらっしゃるプロの方が21種類の野菜の育て方から収穫まで指導してくださるというものです、4月から11月にかけて月2回程度、栽培指導の講座を開催しているものでございます。空いている農地を貸し出す形の市民農園はたくさんありますが、栽培指導型農園は仙台市では大倉と坪沼の2か所だけだったので、珍しい取り組みなのかなと思っております。波及効果というところですが、最近非常に人気があり、一度受けた方が次回受けられないような状況になっておりますので、一度受けられた方は卒業となりながらも、新しく入ってこられた方の指導をする側に回ってもらいボランティア的に動いていただくという形で、今年ぐらいからそういった取り組みもしておるところでございます。坪沼は高齢化しております。新しい担い手がなかなか育ちにくい状態でございますので、ご自身は坪沼に住んでいなくても坪沼のファンになっていただいて、新しい農園使用者の方々に自分のノウハウを伝えていくという新しい形の担い手になってもらえば、非常にうれしいなと思っているところでございます。

[高橋委員]

町内会などの地域の担い手がキーワードだと思うのですが、例えば今総務省で学生のインターンが滞在型のボランティアなどをする、ふるさとワーキングホリデーという取り組みを進めています。私たちも若い人の力をどうやって取り入れるかというところでは、SNSとかデジタルにたけている若者や学生も多いので、ツイッターやウェブサイト、アプリをつくるといったことも担い手の一員としてやっていただくと、若い人との交流が図れるかなと思っています。何か社会に貢献したり役に立ちたいという若い方が今すごく多くて、活動の場を探していらっしゃると思うので、そういったところで生かしていくといいかなと考えています。

[高浦委員長]

若い人たちのまちづくりのきっかけづくりという点では、農業という切り口はすごくパワーを持っているかもしれませんね。若林区でReRootsが、まちづくりと農業支援を掛け合わせて、しかも若い人たちの中から就農をされる人たちも卒業生として出てくるといった動きも起こっていますので、ぜひ全市的に取り組みを進めていただきたいなと思っており

ます。若い人の活用という点では、STORIAの佐々木委員、いかがですか。

[佐々木委員]

若い方たちを見ていてすごく思いますのは、町内会の仕事の内容も、今のシニアの方々がなかなかできないものがあったりしますので、新しい形の仕事内容もいろいろと切り出していく中で、若い人たちも場合によってSNSなどもありましたけれども、そういう方法だけではなくて、そもそも前提を見直す時期が来ているのかなとすごく感じています。

いろいろな取り組みを聞かせていただきまして、青葉区や太白区でも、すごく協働の取り組みをしているなということを感じておりまして、特に太白区の「小さくても未来へつながる連携」という取り組みはすごくいいなと感じingいました。私たちも、子供の貧困みたいなところに取り組んでいるのですけれども、社会課題を解決するために協働したいという気持ちはあるのですが、社会課題を解決するだけだとすごく疲弊してしまうんですね。その先に、どんな未来にしていきたいのかといった視点を持っていると、私たちとしてもすごくワクワクしながら取り組むことができるので、課題の解決は大事ですけれども、プラスこの先の未来をつくろうみたいな、そんなメッセージの出し方がよく分かる取り組みだと良いのかなと感じingいました。

[高浦委員長]

まち歩きマップの作成というお話も太白区の事例でご紹介いただきましたが、さらにそこから進んで自分たちのまちがどういう未来形になっていけばいいのかという、そんなところを将来のマップづくり、そこまで進んでいけば、なお面白いですよね。女性の視点も大事だと思うのですが、緑上さん、岩切地域の取り組みでも結構ですし、いかがでしょうか。

[緑上委員]

地域課題で話していると、やはり次世代というのはどこでも問題になっていて、若い人を取り込むとなると、大体SNSって出てくるんですよ。ただ、SNSの活用って大事だよねと言ったところで、じゃあどうするというところで話が止まってしまうというのが多分現実で。実際にまちづくりというか、町内会とか役員世代の人は、ほとんどSNSを使ってない方々で、名前は聞いたことがあるけれど使い方もわからない、教えてもらっても若い子の目に留まるような情報発信はできないのではないかというのもあって。若者を取り込むためのSNSの発信に若者が必要だというこのすごいジレンマですよね。だから最初の若者をどこでゲットしてくるかというのがすごく課題だというのが、普段の地域活動の中で思っています。また、SNSって個人のアカウントでの発信が基本になるので、中核となっている方の負担が大きいことがあって、その方頼りになってしまふ。管理運営とともに、好きでやっていると言われてしまうかもしれません、地域活動は基本ボラ

ンティアなので、そんなに責任を負わせたくもないですし、かといってあまりばらけてしまうと意見の集約ができなかつたりするので、すごく地域ならではのジレンマがあります。これが企業やきちんとした団体といった中核となるベースがあって、そこを中心てみんなで運営しましょうという形だったらしいのですが、地域ってそういうものがなくて、町内会のお金だって、会長とか会計の口座にぽんと振り込まれるという形で、会計の個人の判断で引き出ししているような状況ですよね。それを考えると、やはり個人とソーシャルというものがいつも難しいなというのは、地域の中で会議をしていていつも思うところです。「発信したいね、でもどうやってやるの、ツイッター、インスタグラムがいいの、どれにする」といった話から始まつていて、「どうやってやつたらいい、でも私ずっとやるのは無理」という話になって終わってしまう感じが多いんですね。なので、そのあたりってどうしたらしいのかというのがすごくあって、ぜひ皆さんのお知恵も借りたいし、できれば行政の皆さんからも何か少し提案してもらえると嬉しいなと思っています。私もSNSはすごく苦手なので、いつもジレンマになっています。

太白区のほうですけれども、移動販売がうまくいっているようで、すごくいいなと思いました。移動販売で一番問題になるのが販売場所の確保だそうです。トラックが停まって回りに人が集まつても危険じゃない場所、邪魔にならない場所というのは意外とないんですね。買い物難民の方がいるから、そこに行って販売をしたいけれども、トラックを置く場所がないから販売できないというのが結構たくさんあるんです。そこで、こういう公共のスペースを一民間企業に開放することができるんだというのは、すごくびっくりしまして、もしこういうことができるのであれば、ほかの地域にもどんどん広げることが可能なではないのかなと感じました。今、高齢者の運転の事故が問題になってきていて、地域の買い物がすごく不便になってきているというのは聞いていますし、生協では「うちにも来てと言われるけれども、そのルートで走つたら売る場所がない」とか、いろいろあるみたいです。この移動販売、生協ですよね。

[事務局（太白区地域力推進担当課長）]
お見込みのとおりです。

[緑上委員]
こういうのを企業もやりたくて、住民も求めているけど、その場所がないというのがすごく大きな課題で、そこで行政の方が手を差し伸べてくれると、多分皆さんの要望が一致して、こういう形になるのだろうなと思います。これはほかの区でもたくさんある事例なので、ぜひこういう情報は共有していただきたいなとすごく思いました。

[傳野委員]
例えば、私たちの町内会では、総会資料を若い人と交流しながら作成したり、班長会に

子供会の方々を呼んで、対話をさせてもらったりしています。そのほかにスポーツ大会、お祭りとかどんと祭、防災訓練、スポーツ大会、いろいろ行事があるのですが、子供会からも参加してもらっていて、ほとんどは学校を借りてやっています。学校にそういったことを相談できる窓口も出来たので、その人たちにいろいろ尋ねて、してほしいことを伝えるということが、まず一番大事かなと思っています。また、公園があるので、草刈りをしながら、若い世代と交流するようなイベントもしています。それと、泉区社協で地域資金運用検討会というのがあって、毎年遠足などを計画しています。バス代を10万円使って、あとは会費をいただいて、いろいろなところに連れていくと、すごく和むんですよね。今年も秋に予定しています、行くところも決めていて、私も行こうと思っています。

[高浦委員長]

とても楽しそうなイベントをされている町内会だなと思ってお伺いしました。子供会との連携も密だし、また地区社協とのつながりもあって、そこで現役世代の方たちとの関わりも出てくるしというところで、本当に多様な広がりを見せていただいているなと思います。そしてきっと傳野委員がアイデアパーソンであって、いろいろとこうしたらいいということを周りにお話してくださることで、周りの人たちも感化されて動いているのだなと改めて思いました。若い人ばかり注目されがちですけれども、地域の元気な高齢の方たちのアイデア、知恵をどういうふうに地域に生かしていくのかという視点も大事だと改めて思いました。

ほかの委員の皆さんも、一人ずつお話を聞いていきたいところではございますが、今日は限られた時間の中で、かつテーマが盛りだくさんということもありますので、ここで休憩を5分ほど取らせていただいて、2つ目のテーマに進みたいと思います。

～休憩～

テーマ2：時代の困難に挑戦する新しい発想の協働

[高浦委員長]

では2つ目のテーマ、「時代の困難に挑戦する新しい発想の協働」に移りたいと思います。こちらについて、事務局から話題提供をお願いいたします。

[事務局（市民協働推進課長）]

2つ目のテーマ、時代の困難に挑戦する新しい発想の協働では、本日の会場ともなっております市民活動サポートセンターの取り組みについてご紹介いたします。市民活動サポートセンターは、市民活動を支援し協働によるまちづくりを推進することを目的とする施設で、平成11年に青葉区本町に開館し、平成18年9月にこの場所に移転しております。フリースペースや各室の提供のほか、市民活動に関する相談、要望の収集・発信、図書の貸

し出し、人材育成や交流促進のイベントなどを実施しているところです。本日は、日頃施設にいただぐご相談などから見えるコロナ禍での市民活動団体の状況などを中心に、市民活動サポートセンターのセンター長からお話ししさせていただきます。

[事務局（市民活動サポートセンター長）]

私は、普段の市民活動サポートセンターで、特に昨年はコロナの関係の相談がいろいろありましたので、実際に仙台で市民活動をしている方々の状況にかなり近いものがあるのではないかと思いますので、どういう状況なのかということを皆さんに話題提供させていただきまして、この後の議論の参考にしていただければと思います。

資料の2ページ目をご覧ください。サポートセンターでは活動相談という市民活動に関する相談を受けておりますが、令和2年1月ぐらいから日本でもコロナの感染者が出始めましたので、コロナでどうしようといった相談が令和元年度では10件ぐらいありました。令和2年度4月を過ぎてからコロナに関する相談が増えて、全体で受けた相談の4割程度、120件ぐらいの相談がありました。コロナ以外の相談は前年から3割ぐらい減っているので、全体の3～4割ぐらいの団体がコロナで何らかの影響を受けたというところです。

3ページ目は、その属性別ですので参考にしていただければと思いますが、市民活動のコロナ関係の相談数がどんどん増えておりました。

4ページ目、活動内容から見えるコロナの影響ですが、期間によって相談内容が全く異なっていましたので、期間を区切って説明をさせていただきます。第1波から外出規制があった3月から5月の辺りでは、主催者や代表者の方がすごく混乱しているという状況でした。情報不足の中で事業を実施するかしないかということで、団体の中でも意見が割れたり、やってみたら参加者からクレームが来たりということで、かなり負担があったのだなということがうかがえます。一方で、コロナが直撃した社会課題として、令和2年3月から5月の間で学校が休校になってしまったことで子供の一時預かりのニーズが上がり、急遽対応している団体があったりですとか、路上生活者など住民票がないとワクチンが打てないのではないかということもありましたし、あとは貧困とか雇用問題、非正規ですか、アルバイトの日数が減ってしまうということがったり、その辺の相談の対応をしている団体は急に忙しくなっているということがありました。また、行政のサービスに関しては、活動場所が休館してしまって使えないといったことや、いろいろな支援策が出てきているのだけれども、たくさんありすぎて分からぬという相談があったのが令和2年の春です。

そこから、今度はいろいろと再開してくると、5ページ目ですけれども、活動再開へ向けてオンラインへの切り替えなどいろいろ出てくるのですが、ほかの団体はどうしていますかというような問合せが結構多かったというところです。オンラインへの切り替えで良かった点としては、全国から参加者が来るようになりますとか、全国との交流が可能になったという声がありました。逆にオンラインだと高齢者や障害がある方には難しい、

使えない人にどう説明するかといったことや、デリケートな相談はオンラインだとやりづらくて対面でないと話せないことがあるということが出てきたのはこの時期でした。活動を切り替えていくところもこの時期から結構あって、情報発信に切り替えていきますとか、実際に会えないので発信するしかない、あとは食育をしているところが食べること以外の方法に切り替えたというのがこの時期でした。子供の居場所づくりや、困窮者支援、コロナ差別相談ということで新たに団体が立ち上がってきているというのも6月から9月にかけて見られたところです。

次に6ページ目をご覧ください、10月以降から今まで続いていますが、再開と縮小に二極化していっています。再開するところは再開するがゆえの負担増、感染対策をしなければいけなかったり、オンラインに切り替えるための初期投資が必要だったりということがありました。あとは、コロナが怖いのでボランティアが参加しなくなつてその確保が難しくなっているとか、逆に、やつたところは参加者が増えるということが起きていました。活動休止からの反動や、似たようなところが休止していて、活動しているところに集中してしまうといったことが聞こえてきているところです。あとは、オンラインなので直接会えないので大変ですという声もありました。活動を縮小した団体は課題があつて縮小せざるを得ないのですが、これまで関わりがあった受益者や会員との関わりが減少してしまうので、このまま解散に向かってしまうのではといった不安があるようでした。実際に活動が縮小していった結果、解散に至るケースも出てきて、あとはボランティアやスタッフのやる気ややりがいがなくなってしまうというところが出てきたところです。活動を再開したところでの工夫として見られたのは、例えば脳トレをやっている団体では、高齢者が参加しなくなることがすごく怖い、せっかく出てきていたのがなくなつたら、そこから先が不安ということで活動を再開しましたが、これまで10人ぐらいの参加者に対して10人のボランティアが参加するような形を取つて一気に集まつていたものを、3、4人ずつに3回に分けて開催するというような工夫をしていました。また、植樹をする団体が、せっかくみんなステイホームなので、植樹のための苗をそれぞれが家に持ち帰つて育てて、オンラインで育ち具合を見せ合うといった、若い団体だとそういう発想の転換で切り抜けているということもありました。

7ページ目です。市民活動団体以外からも、少ないですけれども相談がありました。地縁組織というところでは、商店街に関わっているところから、このまま商店街が衰退していくのではないかということが不安だというお話ですとか、マスクの寄附をしたいという企業からも相談がありました。また、業績が悪化してしまった会社では社会貢献部門への風当たりが強くなってしまったという声も聞こえてきました。まとまつた数のボランティアを派遣していた企業からは、受け入れ先が見つからないという相談もありました。市民の方からは、コロナで困っている人の役に立ちたいという人たちも出てきていたというところがあります。

8ページは、令和3年度の12月までの集計ですが、コロナ関係は一旦落ち着いてい

ます。全体の2割ほどの44件ということで、やはり皆さん次のステップというか、両極化で活動を縮小したところは相談に来なくなっていますし、活動を再開したところは、自分たちでスキルを積み重ねているという形です。

10ページ以降では、我々の「せんだい・みやぎソーシャルハブ」という取り組みをご紹介します。

11ページをご覧ください。コロナ禍での社会課題をテーマにオンラインで情報交換会を始めました。令和2年度中は24回実施して延べ319人、企業の方ですとか大学の関係者、大学生、市議会議員までいろいろと参加していただいております。

12ページにあるような貧困ですか子供のことなども、テーマとして取り上げたりしています。

13ページですが、オンライン情報交換会で、コロナでアルバイトがなくなって大変だよねとか、親のほうの都合で仕送りができないということもあるよねということで、若者の困窮について何かやりましょうということになり、そこで集まったメンバーの中から有志が集まって、最初勉強会をして、若者に「困ってる」と言つていいんだよという情報を届けようとか、ヒアリングを実施していく中で、食料提供や情報提供する「学生団体はぐね」というのが生まれています。

14ページ以降は、企業のCSRはどういうことをしているのかということを、参考にご紹介しています。仙台のCSRの検索でヒットした企業66社と、宮城県の売上上位50社のホームページを確認したのですが、実態のところだとやはり「ごみ拾い」というのが一番多く、企業が考えているCSRというのは今のところそういう状況です。ただ、フードドライブへの参加だとか、寄附とか寄贈ということもある程度の割合でみられていて、協働というところにいくと、行政との協働のほうが実はNPOと協働しているのよりも多いなというところです。

15ページ、16ページはKDDIにヒアリングした内容を参考に載せておりますので、後程ご覧ください。以上で私のほうからは終わらせていただきます。

[高浦委員長]

コロナ禍で社会課題が一層深刻化する中で、市民の皆さんのが共助のところをいかに支援していくのかというところで、いろいろな取り組みをしてきました。また、活動団体もまさに発想の転換、発想を切り替えていろいろとコロナ禍に対応されているというところも、そうしたアイデアをぜひ横展開いただくような取り組みにつなげていただければと思っています。前半での緑上委員のご意見の中で、どういうふうに情報発信力を高めていくのかというところで、SNSの活用があったんですが、目立たないところで発信しても、なかなか聞いていただけないというのがあるかと思いますが、いかがでしょうか。

[事務局（市民活動サポートセンター長）]

先ほどの太白区の取り組みにも出てきていた八木山まちづくり研究会の報告書の中でも、ホームページを立ち上げてSNSを始めたけれども、有名じゃない人が有名じゃないイベントをやっても、やはり全然アクセスがないということでした。ただそれが、地元のインフルエンサーといいますか、地元で情報発信を頑張っている人の目に留まって、その人が発信をしたところ急激にアクセスが伸びた。そして、イベント自体の知名度がインフルエンサーのおかげで上がってきたり、自然とホームページやSNSのアクセス数も増えたということですので、地元で少し有名な人とか、地元の情報発信をしている人とつながることがいかに大切なことが出ていました。

[高浦委員長]

こうしたローカルなインフルエンサーをどうやって見つけたらいいかというところではどうですか。どうやってそういう人たちにたどり着くことができるかという点では、これはもういろいろなネットワークからでしょうか。

[事務局（市民活動サポートセンター長）]

逆に言うとローカルなインフルエンサーなので、八木山地域では有名な人ということで、その人の目にたまたま留まったようです。ただ、仕掛けはしていて、八木山テラスというところに、詳しいことは書かないのぼりをわざと立てていたらしいです。そうしたら、地元の面白いものを発信しているインフルエンサーの人だったので、「これ気になる、何だろう」というつぶやきが最初だったということで、わざと全貌を明かさないという工夫をしたことや、のぼりだけだとネットで検索しないとたどり着かないので、目につくことをまずすることをおっしゃっていました。

[高浦委員長]

なかなか巧みな情報戦略ですね。興味深いです。こうして話題提供をいただいて、改めて委員の皆さんから時代の困難に挑戦する新しい発想の転換というところもあるなという気もしましたが、必ずしもコロナに限らず、SDGsの潮流、またデジタルトランスフォーメーション、DX化ということも進んでいますので、現在の社会情勢を踏まえてコロナ後も見据えながら、新しい発想の協働とはということで皆さんの知見をお伺いできればと思っております。前半ではあまりお話をいただけなかった委員の皆さんから、優先的にお話をいただきたいと思っていますが、いかがでしょうか。NPO市民活動団体に限らず事業者としても、こうしたいろいろな課題に直面して苦労されて、またいろいろな発想で乗り越えようとしていると思いますが、事業者の動向にも詳しい大庭委員、いかがでしょうか。

[大庭委員]

委員長からお話をあったSDGsやデジタル化って、何かすごいテーマが大きすぎて、

我々と接している中小企業、特に小規模事業者の皆さんにとって「じゃあ何から手をつけたらいいのだろう」というところが、まさに今、課題としてあります。我々が基本的な情報提供をしても「デジタル化というけど、どういうところからまず接していったらいいのだろう、何をしていけばいいのだろう」みたいなところは、本当に難しいと感じています。小さなことからでも取り組めるようなことを少しづつ情報提供していくことを、今会議所としてやっているところではあります。どうしてもデジタルの時代が流れてきていますので、伴走して、支援というより一緒に考えていくみたいな気持ちでやっていくのが大事なのかなとは常に思っていて、現場に直接行ってそれぞれ課題を抱えているところをしっかり捉えながらやっていく、また、小さいところから進めていってどんどん大きくしていくといったところも大事だと思います。最初から立派なことをやるよりも、トライアンドエラーというか、少し改善しながら、小さいところから踏み出していって大きく育てていくということが、まちづくりでは大事だと感じました。

[高浦委員長]

地域の商店街の取り組みで、SDGsですと、八幡地区では地域の商店も関わって、地域のお子さんたちがハロウィンのイベントの時期に、お店を1つ1つ回ってお菓子をもらうのですが、そのお店のSDGsの取り組みについて、子供と商店店主がディスカッションするといった取り組みをしていました。例えばうなぎ屋さんであれば、食料資源、持続可能なところに対応していて乱獲はしませんというところで、陸や海の資源を守るということに貢献しています、ということを確認して、お互いにシールなんかをやり取りしながらポイントをためていくみたいな活動をされているみたいで、それだと地域の商工者の皆さんも割と関わりやすいのかなと思いました。あえてそういうのはデジタルにはしないで、アナログ的にシールを集めるというところがまたいいなと思ったりしていました。

[大庭委員]

一気にデジタルにとはなかなかいかないので、リアルな、アナログ的なところを混ぜながら、デジタルも一緒に時代とともに進めていくということが大事かと思います。

[高浦委員長]

其田委員はいかがでしょうか。時代の困難、先ほどの学生、若い人の孤立という問題、大学人としては本当に頭が痛い課題ですけれども、その他の視点でも結構ですし。

[其田委員]

コロナ禍での活動で各団体が試行錯誤されて進められているというのが非常に重要な課題だなと思っておりました。コロナ禍での活動ですが、ポジティブな意見として申し上げますと、対面での事業展開ができないとなるとオンラインでつないで実施する機会が多く

なりました。これはコロナが収束したとしても生かすべきツールであり、それを生かしながらどういうふうに課題に取り組んでいくかという話だと思います。それぞれの団体が抱えている課題は、多種多様だと思います。その中で、先ほどの青葉区の出前の話でも出てきた課題、例えば町内会の担い手不足というのも、もう少し課題を細分化する必要があるのではないかと思っています。6ページのスライド原稿に、担い手不足は町内会運営におけるほぼ共通の悩みと書いてありますが、町内会の活動は、幾つか区分できるのではないかでしょうか。具体的には、年間を通して運営に関わるものなのか、単発の企画に関わるものなのか、あるいは新規加入がなくて担い手不足になっているのかなど、ある程度区分ができると思います。それぞれの町内会で事情も違うと思いますので、もっと課題を掘り下げていって解決をしていくのはいいのではないかと思いました。また、傳野委員が紹介してくださった実際の町内会の活動、私も青葉区に住んでいて町内会に入っていますけれども、企画が高齢者対象のもので、年齢が制限されてしまって参加できないんですね。参加したくて行っても、例えば町内会の役員対象だからあなたは参加する必要ないよと言われてしまったりするのですが、どの世代でも、町内会に入った目的がいろいろあるはずなんですね。町内会に入れば地域の交流ができるだろうといったポジティブな方もいるし、町内会に入らなければいけないとただ単に思っている方もいると思います。町内会に加入している方々が何を考えているのかという調査も必要なではないかなと考えました。町内会の活動の温度差があり、まちまちだと思いますが、どんどん課題を掘り下げていって、課題に対してどういうアプローチをしていくかということをもっと打ち出していくのがいいのではないかと。それには、青葉区で取り組まれている出前事業というのは、継続して行っていただきたいと考えております。

[高浦委員長]

行政もどんどん町に出ていっていただいて、課題を掘り起し、町内会の活性化につなげていただけると良いですよね。私も子供会でいろいろさせてもらいまして、コロナ禍の前でしたけれども、すいか割りの体験などは、なかなか町内会の皆さんの準備が大変だなと思いながらも、本当に貴重な体験で、今子供が少なくなつて子供会自体の運営が私の地域では危ぶまれている状態ですが、そういうことがあると、お子さんたちも子育て世代も寄っていただけるのかなと思ったりします。

[沼里委員]

私が携わっている地域は、地下鉄東西線荒井駅の周辺で荒井南地区がメインになっているのですけれども、去年は町内会や地域住民の方からにぎわいがないとか、人が集まる場所での活動ができなくなつてきてるので協力してくれないかというお声をいただいて、1年間いろいろチャレンジしていました。1か所でイベントをやると人が集まってしまうので、にぎわいはできつつも人が一か所に集中しないようにできないか、外から来ていた

だくと人が増えてしまうので、まずは地域でやってみようということで、地域の企業と町内会にご協力をいただいて、まち歩きイベントを開催しました。とてもいい雰囲気で、人も集まりすぎず、特にコロナの感染者が出ず無事に終了できましたので、そういった良い点を踏まえて、今年はどうしようかということで、地元の有志の方やイベントに協力してくれた方と話し合いを何回かしたところ、やはり若者の力が必要だというこという話になりました。まちが生き続けるためには若者がそこに集うというか、そこで起業してみたいとかチャレンジできる場を地域としてつくっていく努力を私たちはしていかなければいけないということで、今年はチャレンジとしていろいろと計画していることもあります。今日のお話はすごく参考になりました。そういう話が出てきたときに、相談する場所が今までなくて、間に入ってまちづくりをお手伝いする側として、区役所や事務局みたいな存在があれば、とても心強いなというのを最近すごく感じてもらいました。面白いなと思ったのが、先ほどの八幡地区のお話は、うちの地域でも食育の話が出ていて、SDGsとか、環境と絡めていかないとならないという話が出ているものの、実際集まってやるのは難しいという状況の中で、こういうアイデアがあるんだということを発見できました。また、うちの地域は若い方も多いのですが、高齢者も多くて、回覧板が一番最強の情報発信ツールだったりするので、デジタル化も考えつつ、よい方法を試行錯誤していきたいなと思いました。

[高浦委員長]

まち歩きイベントという、密にならないような形で、しかしみんなが集えるような機会って本当に大事ですよね。距離を保つつも同じ空間をご一緒するというのは、まちづくりの原点だなと、改めて伺わせてもらいました。子育て世代は回覧板を回すのも大変だったりしますが、町内会長が一生懸命作ったチラシなどを拝見したりすると、「頑張っていらっしゃるな」といったつながりを感じますよね。

[緑上委員]

今回で任期が終わる最後の会議だと思うので、まちづくりというものに関して、少し私なりの意見を言わせてもらってもよろしいでしょうか。

にぎわい創生や未来への継続性というお話などいろいろ出ていましたが、まちづくりの基本は安全で安心であることが一番だと思っています。そこに住み続けるためにも安全な地域でなくてはいけないし、何かあったときに安心できるものがある場所がまちになってくると思っているのですが、仙台はSDGs未来都市宣言で防災環境都市とうたっているものの、地域にはいまいち浸透していないように思えます。身近なところで防災の何かがあるかといったときに、意外と地域の中にはないんですね。小学校や中学校が避難所になっているくらいで、ほかに防災のためにやっていることって何だろうと思っても見えなくて。前回も私は公園づくりのお話をしたのですが、公園にぜひマンホールトイレを設置し

てほしいなと思っています。東松島なんかは条例で、新しく公園をつくるときには必ずマンホールトイレを設置するとなっています。避難所の運営で一番困るのが、食べ物の次は排泄物の処理で、トイレの水が流せないとなるとすごく大変なのです。もしマンホールトイレが近くの公園にあって、ふたを開けて便座を設置したらすぐ使えるとなれば、避難所を運営する側もすごく負担は減りますし、そう思っただけで気持ちも楽になります。地域の方も安心して避難することができるのでないかと思います。地域の公園を新設するときにはこのマンホールトイレをぜひ設置してほしいですし、もし公共施設の敷地内にスペースがあるのであれば、マンホールトイレとか防災ベンチというものをぜひ設置していくだいて、仙台市はこうやって地域住民を守る施設をどんどんつくってくれているのだなというのを地域の方にアピールしてほしいなと思っています。一生懸命やっていらっしゃることがなかなか地域に伝わってないというのは、すごくもどかしい思いもあるので、見える本当に身近なところをやっていただけたらうれしいなと思います。

[高浦委員長]

防災を基点にしながらのまちづくり、仙台らしさでもあるし、また日本全国、世界に発信できる大事な視点かと思います。緑上委員のように皆さんからも最後に一言いただきたいと思っておりますので、ここで一旦テーマの2つ目は締めさせていただきたいと思います。活発なご意見を頂戴しまして、ありがとうございました。ぜひ今後の市の施策展開に生かしていっていただきたいと思います。

3 その他

[高浦委員長]

最後に次第3、その他ですが、事務局から何かございますか。

[事務局（市民協働推進課長）]

事務局からは、特にはございません。

[高浦委員長]

ありがとうございました。

そのほか皆さんから何か、ご挨拶以外に情報提供等ございますか。特になければ、協議事項としては終了させていただきたいと思います。

改めまして、今回が任期の最終となりますので、委員の皆さんから一言ずつご挨拶をお願いいたします。

[安藤委員]

市民協働ということで、私の最後の意見としては、やはり市民が挑戦できるまちにもつ

ともっとなってほしいという思いがあって、それを行行政が後押しするような体制をつくつていただけたらうれしいなと思っています。私は、事業としては「まちづくり若者ラボ」などに関わらせていただきましたが、最終会で皆さんととてもすばらしいプレゼンをされて、例えば仙台のここがまだ地域の課題として残っているというプレゼンをして、こういう解決策をやっていこうという具体的なアクションの提案を毎年しています。この事業自体はすばらしいと思うのですが、種はまいたけれども、なかなかそれが育たないという状況になっているのかなとは思っていて、そういう意欲のある若い人や市民の方って本当にたくさんいらっしゃると思うんですね。そこからどう年度を超えて事業化したり継続していくたりするのかということが、多分一番大事なところなのではないかなと思います。ただ「すごいね」と思うのではなくて、事業として厳しい目できちんと見て、例えば初年度だけ予算をちょっとだけつけてあげるとか、そういう本当に少しのサポートをして、これから人口も減っていく中で、行政ができるここというのも限られていくと思いますので、そういう形でどんどん民間の力を活かして、育てていくということを仙台市にしていただけたら、市民としてはとてもうれしいと思いました。ありがとうございました。

[大庭委員]

2期務めさせていただきまして、大変ありがとうございました。あっという間に時が過ぎましたが、いろいろ思い返すと、前の期ではパンフレットを作るお手伝いをさせていただきましたけれども、やはり情報発信って非常に大事かなと考えています。若者のお話もいろいろ出ていますけれども、いいことをやっても伝わらないと意味がないので、どうアプローチして情報を伝えていくのかという点は非常に大事だと思いますので、こういった協働まちづくりというテーマを、ぜひいろいろな方に幅広く伝わればいいなと思っております。商工会議所にいる限り、地域支援のところでいろいろな仕事をこれからもさせていただきますので、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

[佐々木委員]

私自身もNPOをやりながら、本当に協働って難しいなとすごく思っています。いろいろな枠を超えて協働することもですし、同じ業界で協働するとしてもお互いの思いが熱いからこそそれ違ってしまうこともあります。また、地域の方々も世代が変わってきて、いろいろな価値観があることも分かりますし、そういった中で協働を進めるということはとても難しいなと実感しているところです。ただ、協働することが目的ではないだろうなということも感じておりますし、協働の先に何があるのか、何にいいことがあるのか、何を私たちつくりたいのかと、協働の先の見えるビジョンをみんなで見ていくことが、困難を乗り越えたり、1つ話題ができたり、リスペクトしあえたりといったところにつながっていくのかなということを、私自身も日々議論させていただきながら気づかせていただいております。私たちもご年配の方もそれぞれ思いはあって、その思いをかなえられる環境

していくにはどのようにしていったらいいのかということも、私自身もNPOとしてチャレンジしてまいりたいと思っております。また、なかなか組織をまたぐといったことは難しいのも承知でございますが、行政の横のつながりも活かすることでアイデアが生まれて地域に入っていくといったこともあるのかなという願いも込めて、最後にお話させていただきました。皆様、どうもありがとうございました。

[高橋委員]

委員会に参加させていただきまして、地縁組織の皆さん本当に地元愛を持って活動されているという形で、私も改めて「町内会もそうだったな」というふうに思い起こした場面がたくさんありました。自治体が財政難になっていく中で、こういう支援の事業というのは縮小していくことになるのかと思いますが、NPOでもいろいろな事業を支援してもらっているものは、精査されることでだんだん縮小せざるを得ないことも出てくるかもしれません。しかしそれによって、市民活動も縮小していくのかというと、最終的には財政がどうということよりも、ビジョンというものが先ほど佐々木委員もおっしゃったようにすごく大切で、私たちがどんな思いを持っているのかといったことや、参加する人たちがその地域にどう貢献したいのかということをみんなで考える場があるといいなと思いました。

私は農業に関する取り組みをしているので、その関係で一つ情報共有させていただきます。千葉県いすみ市は人口3万7,000人なのですが、支援金を使って子育て世代の家族の移住者がとても増えています。その理由の一つとして有機米給食が100%実施されているということがあるのですが、それが市民活動から派生したことがきっかけだということで、私たちも有機米給食をこれから取り組んでいこうかなと考えています。給食は子供たちの未来を考えて始まったことではありますが、それによって、先ほどお話のあったいろいろな部署が横断的に関わることで、いろいろなところで相乗効果が表れています。農林課でしたら、担い手の新規就農者が増えてきていたり、お母さんたちで集まってコミュニティ農園をつくって、みんなで有機野菜をつくってみようというチャレンジをしているみたいです。それによって人々が集まっていて賑わいが出てきて地域振興の一環になっていて、自治体がすごく活性化されているというので、1つの取り組みから、それだけのことが起きているというところが、すごく希望を持てるなと思いました。やはり一人一人のそういう思いと、みんなで一丸となって1つのものに取り組んでいくというチャレンジが、私たちが下支えしていかなければいけない部分だとすごく思いました。私もできる限り、同じNPOなどと一緒に取り組んでいきたいと思っています。ありがとうございました。

[傳野委員]

私は転勤で岩手県の花巻から仙台その他いろいろなところに行きましたし、いろいろな地域や世代でそれぞれ考え方も違うと思います。我々が小さいときは、まちは町内会青年

部というものが一番働いていて、盆踊り大会や子供たちの海水浴までみんなで見てくれていました。仙台に住みついて何十年かなるのですが、まちが進歩しすぎて、そういう団体や場がなくなっていると感じます。我々は高齢者と言われますけれども、いわゆる知識と経験、キャリア、そのほかに能力もあります。人生100までということになれば、やはり今の若い人たちはこれを目指して頑張っているので、むしろなり手がないのは当たり前です。70まで働いているという現実を見たときに、我々はやはり85までは頑張らなければいけないだろうなという気概を持って、いろいろなことを仕掛けています。町内会では仙台フィルハーモニーを呼んで皆さんに聞いてもらったり、市民センターと共同で毎年年末にジャズフェスティバルもやっています。我々もただ長生きするのではなくて、元気を持って、皆さんの地区のために頑張りたいという熱意でやっていますので、邪魔にしないでください。むしろ若い方は家庭と職場を大事にして、日本を本当に世界中の経済の潤ういい場所にしていただきたいなと思っています。

[沼里委員]

私は日頃まちづくりをサポートしている組織おりますが、今までこの委員会ではなかなか発言ができず申し訳なかったと思うのですけれども、私個人としては本当にすばらしい情報や知恵をいただいた時間で、それをいつも会が終わるたびにいろいろ考えることがありますて、実際に地域に生かしていくながら、学ぶ時間というか、過ごさせていただいた時間を形としていけるようにできたらいいかなと思いました。ありがとうございました。

[其田委員]

3期6年務めさせていただきました。この6年間で情報発信の冊子体作成、市民活動サポートセンターのリノベーションに関する議論などもさせていただいて、貴重な経験をさせていただきました。今期の2年間につきましては、コロナの影響もあって、なかなか思うように回数あるいは活動も展開できなかったと思いますが、今後においても、仙台市内の大学の職員として、いろいろと市民の協働に資する動きができればと考えております。皆様、どうもありがとうございました。

[高浦委員長]

宮城大学の風見先生、非常に偉大な委員長の後を受け継いで、どこまでできるかということで始めさせていただいた2年間でしたけれども、市民協働推進課の皆さん、事務局にお助けいただきながら、また其田委員はじめ皆さん議事進行にご協力いただいて、本当に実りあるディスカッションを重ねることができたなと思います。特に昨年は、まちづくり推進プランにいろいろとご意見、アイデアを頂戴しながら、3つの視点を何とか織り込むことができたなと非常に感慨深いものがあります。今日も3つのテーマについて、いろいろな歴史の流れの中で、さらに育成培養していくのかという視点で議論ができる本当によ

かったなと思います。また、まちづくりの現場で活動されていらっしゃる市民の皆さん、まちづくり関係の皆さん、そして市役所の皆さんいろいろなアイデアを、どんどん共有していくような場ができればと思っているところであります。また、何かご縁があってお手伝いできる機会があればと思っております。本当に2年間、今期いろいろと議事にご協力いただきありがとうございました。皆さんに本当にありがとうございました。

4 閉会

[事務局（企画係長）]

高浦委員長、ありがとうございました。

最後に、市民局長の佐藤より一言ご挨拶申し上げます。

[事務局（市民局長）]

本日も熱心なご議論いただきまして誠にありがとうございました。市民局、幾つか審議会、委員会を所管しておるわけですけれども、この委員会が一番、私個人としては勉強になる委員会だなと思っています。本当に2年間お世話になりました。ありがとうございました。今期最後の会議ということでございますので、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

昨年度は、皆様から多大なお力添えをいただきまして、「協働まちづくり推進プラン2021」を無事策定させていただきました。今年度は、このプランの基本的な方向づけとなりました3つの「重視すべき視点」をめぐって活発な意見交換を行っていただきました。私、4期の先生方としかお付き合いがないわけでありますけれども、恐らく過去最強の布陣ではなかったかなと思っています。皆様方から頂戴いたしました貴重なご意見につきましては、ぜひ具体的な施策の展開に当たりまして活かさせていただきたいと考えております。

新型コロナウイルス感染症との長い戦いが続いております。当委員会も、一部会議の開催を見送らざるを得なくなるなど、影響を受けたところでございます。このような困難な状況にあるからこそ、多様な主体がより一層連携を深め、協働してまちづくりを推進していくこと、それぞれが自らの強みを生かし、共に力を合わせながら、このまちの発展を支えていくこと、こうしたことが大切になってくるものと、このように思います。とはいえ、言うは易く行うは難しでありまして、太白区長を3年務めました私などにとりましては、当時の仕事のほとんどが地域の中に三密の密をつくり出すことでありましたので、お互いが直接に触れ合えない中で、どうやって人と人との絆を結べばよいのか、連携協働の実を上げることができなのか、誠にもって考えあぐねてしまうところであります。新型コロナウイルス感染症が収束しても、その影響は残ることかと思います。人々の考え方や振る舞い方、生活様式や経済活動などなど、全て元通りというわけにはきっといかないと思います。そうした大きな変化に応じて市政運営の在り方、まちづくりの進め方、取り組み方、そして市民の皆様との協働の在りようというものも変わっていくかざるを得ない。私どもは、そ

うした時代の転換点、曲がり角に立っているように感じるところでございます。

私ども市民局、誠に小さな組織ではありますけれども、一寸の虫にも五分の魂と申します、山椒は小粒でピリリと辛いわけでありまして、常に志を高く持って、いつも仲よく団結をして、このまちのために郡市長の下、109万市民の皆様と手と手を携え、明るい未来に向かって尽力してまいる所存でございます。委員の皆様におかれましては、今後とも変わらぬご理解、ご指導、そしてご支援を賜りたく存じます。

最後に、この2年間のお力添えに重ねての感謝を申し上げまして、また委員各位のご健勝、そしてますますのご活躍を心から祈念いたしまして心からの御礼のご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

[事務局（企画係長）]

以上をもちまして令和3年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。

一了一

〈議事録署名人〉

高浦 康有
[委員長]

佐々木 純子
[署名人]

